

生命の変遷

Transition of Life

渡辺直彦

WATANABE Naohiko

2008年ころより、花の雌しべ、雄しべの部分クローズアップして描写するスタイルの日本画制作を行ってきた。それは、生命体に組み込まれたDNAの情報により、遺伝子が受け継がれ、新たな生命が生まれ、個体としての生命は終わっても、種としての生命は続いていくという、まさに自然の神秘を象徴的に表す部分としてとらえていた。テーマはその自然に対する尊厳と、暗にその対照的な人間の作った文明に対する警鐘をこめたものである。

このテーマは以来ずっと続いていて、それをどうしたら表現できるのか、未だ模索中である。2008年に「生命の記憶」というタイトルで続けてきた作品は、2009年より、少し変化し、同じく花のクローズアップではあるが、枯れかけた花、とりわけ落ちた椿の花を描くようになった。このテーマでいろんな花を描いてみたが、一番多く描き、テーマにあう花は椿であった。それは椿の花が大振りで、特に雄しべ、雌しべの部分が大きくはっきりしていることが最大の理由であるが、椿の花が地面に落ちている姿を見て、まるでまだ生きているかのように生々しく美しい姿に、ドキリとさせられたのが、この「生命の変遷」シリーズへの移行のきっかけであった。

そこで、生と死の境目は何なのか、人はものの形は見る事が出来ても、その中にある細胞あるいは自然の仕組みといったものまでは、決して見る事が出来ないのではないかと考えていこうと考へさせられた。落ちた椿をスケッチし、構想を練るなかで、この見えない自然の仕組みを何とか表現できないかとの想いから、写真を使い細部をクローズアップし、やがては人間の視点から、昆虫などの小生物の視点ではどう見えるのだろうと考へ、椿の花を巨大な画面に拡大して描くことを思いついた。

日本画制作は180×270cmの大作を描き、その後 小品では全く別の視点から、部分をクローズアップしたものをトリミングし、それが何か、花の形状がわからないようなアプローチを試みた。しかしどうしても形を描かないと、しっくりいかず、また元に戻るという試行錯誤の中にある。枯れた花に、「わび、さび」を感じるという人もいるが、私の意志としては、個体、種としての生と死、とりわけ生態系の危機的状況を憂いたものとして、物言わぬ花を描いてみようとしたものである。



生命の変遷 7

65.2×90.9cm
麻紙、岩絵具
2014



生命の変遷 1

116.7×116.7cm
麻紙、岩絵具
2009



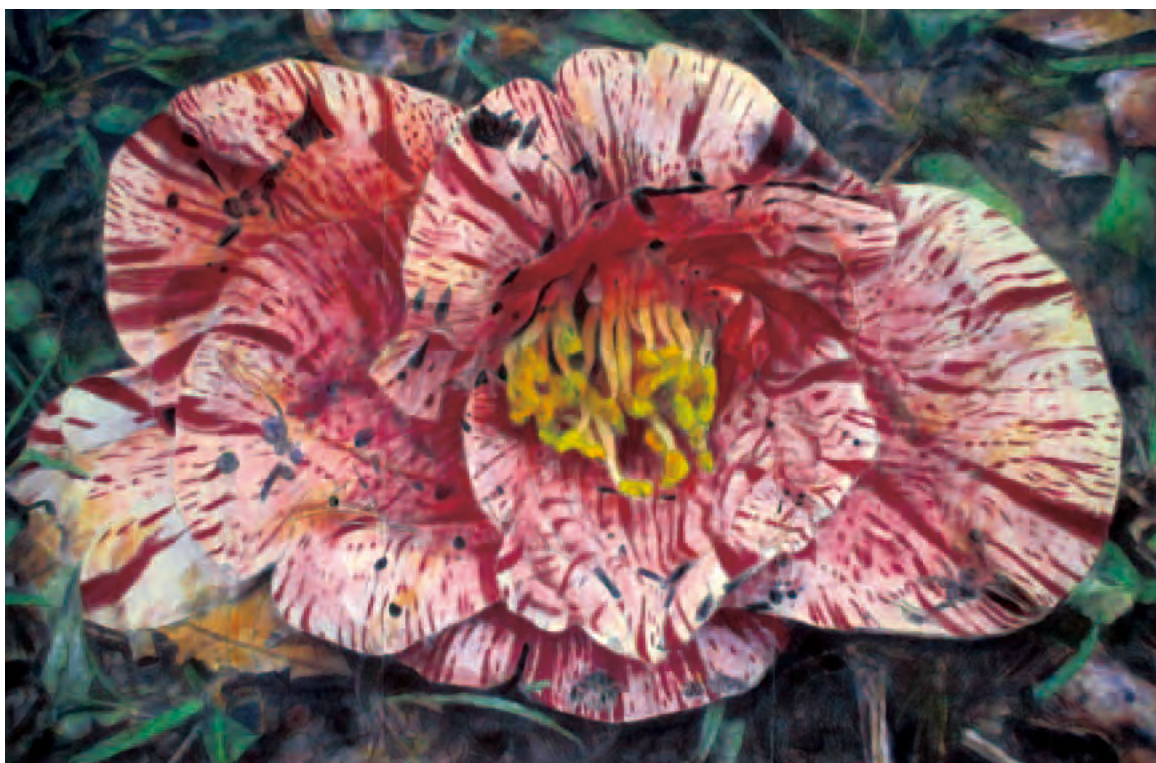
生命の変遷 2

116.7×116.7cm
麻紙、岩絵具
2009



生命の変遷 3

180×270cm
麻紙、岩絵具
2011



生命の変遷 4

180×270cm
麻紙、岩絵具
2015



生命の変遷 5

53.0×72.7cm
麻紙、岩絵具
2013

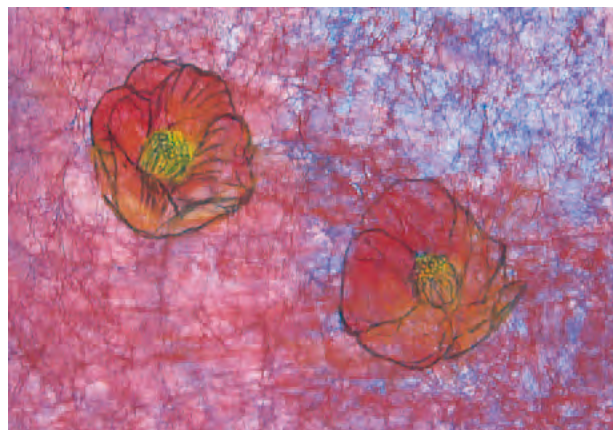


生命の変遷 6

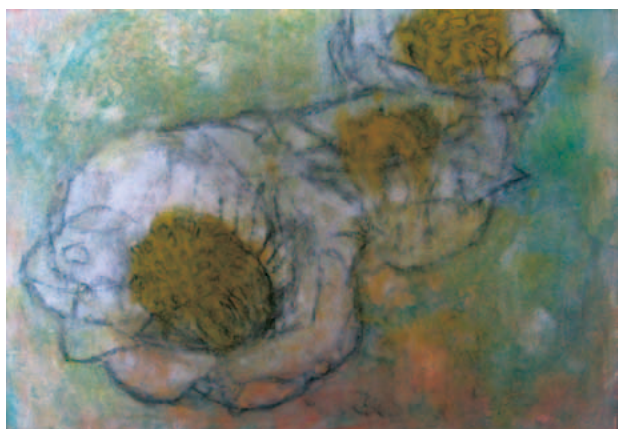
65.2×90.9cm
麻紙、岩絵具
2014



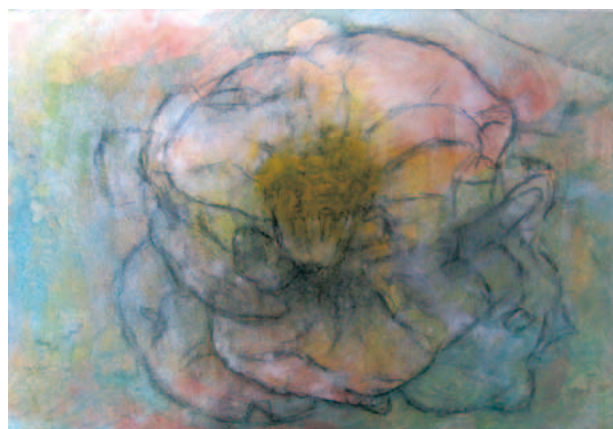
椿 2013-1
22.7×15.8cm
麻紙、岩絵具
2013



椿 2013-2
22.7×15.8cm
麻紙、岩絵具
2013



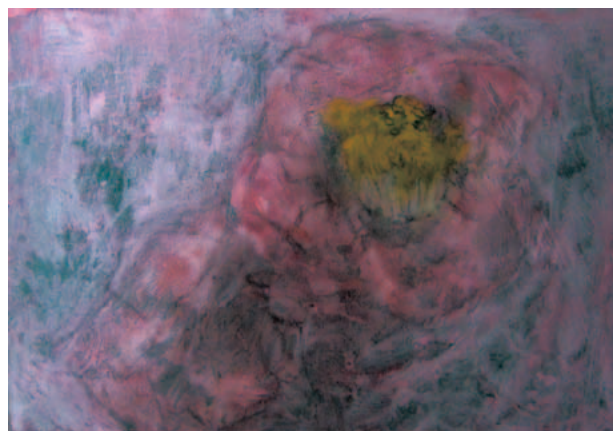
椿 2013-3
22.7×15.8cm
麻紙、岩絵具
2013



椿 2013-4
22.7×15.8cm
麻紙、岩絵具
2013



椿 2013-5
22.7×15.8cm
麻紙、岩絵具、箔
2013



椿 2013-6
22.7×15.8cm
麻紙、岩絵具
2013

アメリカ ボイシー州立大学にて 3月1日～10日まで ゲストアーティストとして招待参加
 展覧会:2014年2月28日～4月18日 SUB(スチューデント・ユニオン・ビルディング)ギャラリー
 講演:3月6日 16:00～17:30
 レセプション:3月6日 17:30～19:30



スチューデント・ユニオン・ビルディング



講演タイトル: “Transition of Life” (生命の変遷)



講演は、全て英語で行った。自作をスライドで紹介する内容だが、コンセプトとしては、エコロジーにも少なからず触れた内容であった。アメリカでエコロジーの話をすることが、その反応も含め、自分にとって意義あることと思ったからである。

個展「生命の変遷」 名古屋造形大学 D-2 ギャラリー 2015年1月26日～ 30日

